墨人間の栄光

※「日本語表現Ⅰ」の課題から転載

座ってはいられない書道に出会った。書道は座って静かに書く、というイメージだ。それを一新させたのが、パフォーマンスである。等身大をはるかに超える紙に、巨大な筆を走らせ、メロディーに乗せて書を披露する。高校時代、その魅力にとりつかれた。

「墨人間」。書道に魅せられた人種のことだ。私もそうだ。

高校文化祭では毎年、パフォーマンスを行う。最高の出来を目指して、夏休みの行動が開始される。三味線の奏でる音とリズムが素晴らしい曲を、自分たちで選曲する。書く言葉や文字も自ら考える。私は『我道』と書くことになった。大学受験を控えた私なりの決意である。

パフォーマンス練習は、過酷だ。毎回、墨だらけになる。足の裏、手、顔、爪の中まで黒に染まる。全力で紙に向かう。墨がはじけ散る。顔に墨が飛んでも、笑いはない。みんな真剣そのものである。動きに遅速の変化をつけ、完成度を上げた。

帰宅すると、廊下には黒い足跡が出現する。裸足で練習するため、足裏に墨が染みつくのだ。風呂場にも足跡。石鹸で洗っても、完全には落ちない。「墨人間」の生活とはそういうものだ。

そして、いよいよ本番がやってきた。ステージの袖で、脈打つ心臓の鼓動を抑えながら、ステージを見つめる。順番を待つ。後輩が真っ黒な顔になって、袖に戻って来た。いよいよ私の番だ。

深呼吸をし、ステージ中央へ行き、一礼。紙に向かう。紙をにらみつける。一呼吸をし、私は飛んだ。「ダーン！」と打ち込み、力一杯に筆を運ぶ。真っ白な紙に、黒が映える。墨をたっぷり含んだ巨大な筆。重量も忘れ、必死に紙に食いついた。

最後の見せ場、「道」のしんにょう。紙の中心から端に、一気に筆と体を運ぶ。ダイナミックな動きに、歓声が沸く。私の魂、『我道』が完成した。

達成感で一杯になった。今でも鮮明に記憶している。「墨人間」。私はそう呼ばれて光栄だ。

（1年・櫻井奈菜子）

私とおかんは同級生

※「日本語表現Ⅰ」の課題から転載

おかんは今春、大学生になった。私が毎晩遅くまで受験勉強に励んでいた時、おかんもこっそり勉強していた。家族はみんな知っていた。知らなかったのは私だけだ。

２月の終わり。大学受験後の帰りの車の中で、おかんが言った。「次はお母さんの番やわ。がんばらんといけんなあ」。私はあまり気に留めず「何で？」と軽くいなした。次の瞬間、おかんの衝撃的な一言。「大学の試験を受けるんよ」。にっこり笑って言った。「誰が？」「お母さん」「…ウソやろ」。試験の疲れと衝撃告白。脱力感で一杯になった。

高３になってから、夜12時すぎまで塾で勉強していた。帰宅するころには、家族はほとんど寝ついていたが、おかんだけは私をいつも待っていた。当時、おかんは頭を抱えながら受験勉強に取り組んでいた。それに私は気づかなかった。

おかんは、これまでもたくさんの仕事をしてきた。何にでも挑戦してみようという意欲がある。どんな仕事も、そつなくこなしていた。「福祉の道」を考え始めていたある日、私が「それ、おかんの天職やん」と言ったらしい。その一言が、おかんに大学受験を最終決断させたという。そして、おかんは必死になって勉強したのである。

この話を聞いた時、おかんが私より輝いて見えた。うらやましい。素直にそう思った（おかんには内緒だけど）。私の合格発表の前日、おかんは大学合格を決めた。「春からは女子学生やわ」と浮かれるおかん。おとんは「誰が女子大生か」と、あきれながら突っ込んだ。

家族の中に大学生が２人もいる。大学こそ違うが、私と同級生である。私の心境は複雑だ。おかん、今年４３歳やろ。（1年・長田莉歩）